ふるさと紀行

切支丹と陶石のまち［天草町］

天草町街並（戦前）

天草町は、山合いの福連木、温泉の下田、陶石の高浜、そして隠れ切支丹の大江、それぞれに異なる文化圏を持つ面白い町。第一次産業を基盤とした文化の香りの漂う「切支丹文化と陶石の町づくり」をテーマに、埋もれていた文化や歴史の復興を続けています。

こうした中で、今後の課題となるのはやはり〝人づくり〟。明るい挨拶日本一運動や二〇〇〇年委員会の設立を通して、明るい町づくり・リーダーづくりが行われています。行政と住民が一体となって、「どうにかせにゃいかん」を合言葉に力強く着実に前進を続けています。

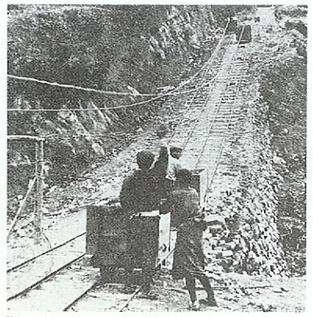
高浜焼窯跡

陶器のふるさと［高浜］

約三百年前から採掘が行われていた天草陶石は、平賀源内が「天下無双の土」と評したように質・量ともに世界一といわれ、有田焼などの高級磁器になくてはならない存在です。

その最大の産地は旧高浜庄屋上田家の皿山と言われています。六代目の伝五右衛門の時より始められた高浜焼は、透けるほど白く薄い優雅な磁器。江戸時代には長崎奉行の命を受け、オランダ向けに輸出されていました。七代目の宜珍は十九世紀に「天草鳴鏡」を著した文化人で、天草郷土史の基礎を確立した人物。この上田家の蔵には数千の古文書が保存され、天草の波瀾に富んだ歴史を伝えています。また、高浜焼の事業に失敗して渡航、マダガスカルで大成功を収めた人物に〝モダン浦島〟といわれた赤崎伝三郎がいます。彼の豪邸は今でも旅館〝白磯館〟として当時の面影を残しています。このように高浜焼は数々のエピソードを残しながら、やがて歴史の表舞台から忘れ去られていったともいえます。

そうした歴史を経て、これまでは試験的に焼かれているだけでしたが、町ではその復興を目指してセラミック・パーク建設を計画。陶石を天草町の一大産業にしようと頑張っています。


陶石運搬用トロッコ（戦前）

ロザリオ館

切支丹の住む里［大江］

高浜から曲がりくねった山道を九キロ、江戸時代の厳しい弾圧にも耐え続けた〝隠れ切支丹の里・大江〟に着きます。

島原の乱から百六十余年たった文化二年（一八〇五）大江・崎津を中心に切支丹信徒の存在が発覚し、五千人以上の検挙者を出すという事件がおきました。いわゆる〝天草崩れ〟です。当時の全人口が一万人余りだったことを考えると、キリスト教がどれだけ根強く人々の暮らしに溶け込んでいたかがよくわかります。後に、この地を訪れたフランス人宣教師ガルニエ神父によって建てられた大江天主堂は、これまで切支丹の聖地として静かで平和なときを過ごしました。天主堂を中心とした人々の暮らしは今も変わることなく脈々と続いています。

「五足の靴」

新詩社同人の五人――与謝野鉄幹、北原白秋、木下杢太郎、吉井勇、平野万里が明治40年に九州の切支丹遺跡を巡った紀行文が『五足の靴』。まだ若い彼らが天草の地で出会った〝パアテルさん〟ガルニエ神父は、彼らにやさしくも強烈な印象を与えました。

「白秋とともに泊りし天草の
大江の宿は伴天連の宿」
（吉井勇）

今年の四月、天草ロザリオ館のオープンによって〝切支丹のまち〟として名乗りを挙げた大江の里。祈りの中心地としての大江天主堂、歴史資料館としてのロザリオ館、そして天主堂北にある〝古寺さま〟をメインに附近一帯の公園化が進められています。

大江天主堂

大江天主堂や崎津天主堂、富岡、下田温泉、妙見浦――自然と文化と歴史の宝庫〝天草西海岸〟。「天草はひとつ」をテーマに、近隣とのつながりを持ちながら一日でも長く滞在できる観光地づくりを目指す天草町。人と自然とがほどよく調和した町づくりが今からとても楽しみです。